

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K20722

研究課題名（和文）第二次大戦期「帝国主義」の国際比較：グローバル・ファシズム研究の基盤構築に向けて

研究課題名（英文）Comparative Research on Axis Imperialism in the Second World War: Toward the Construction of a Field of Study in Global Fascism

研究代表者

門間 卓也（Momma, Takuya）

関西学院大学・文学部・研究員

研究者番号：90868291

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二次世界大戦時にナチ・ドイツまたは大日本帝国の勢力圏に含まれた欧州諸地域、あるいは中国や東南アジア諸国に焦点を当て、現地社会の統治体制内部で「コラボ（漢奸）」が実践した対独・対日協力の複雑な諸相を比較検討するものである。研究遂行にあたり、西洋史と東洋史の垣根を越えてグローバル・ファシズム研究の基礎を築くことを主眼とした。またプリモ・レーヴィが提唱した「灰色の領域」と呼ばれる概念を用いて、分析対象となるアクターの行動原理がいかなる「主体性」を孕んだものであるかを精査した。最終的な研究成果は論集（高網博文・門間卓也・関智英編）『グレーゾーンと帝国』（勉誠出版、2023年刊）にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、東洋史および西洋史を架橋する形でファシズム研究の刷新に取り組んだことにある。特に「ファシズム」の土着化を「支配-被支配」の構図に還元するのではなく、日独の「帝国主義」が展開する最中で「コラボ（漢奸）」が単なる体制従属ではなく旧秩序の再編を望みながら「主体性」を発揮し得た背景を考察することで、ファシズム研究を国際比較の主題として再設定すべく努めた。また近年、世界規模で第二次大戦時の経験を巡る「記憶の政治」が隆盛を見せていることを念頭に置けば、あらためて「ファシズム」の実態を精査する歴史研究は、現行の修正主義的歴史観に更新を促す強い社会的意義を持ち得るだろう。

研究成果の概要（英文）：This research aims to elucidate the complex structures of governance in the European countries, China, and Southeast Asian countries that were placed in the sphere of influence of Nazi Germany or the Empire of Japan during World War II. We compared and examined the various types of "collaboration" in these countries. Making comparative studies from international perspective beyond the boundaries between Western and Eastern history, this project tried to develop new research field, "Global Fascism." For that purpose, using the concept called "gray zone" advocated by Primo Levi, we focused on what kind of agency had been contained in the behavioral principle of the actors in the local society. The final research results were compiled in a collection of papers (edited by Hirofumi Takatsuna, Takuya Momma, and Tomohide Seki) "Gray Zones and Empires" (Bensei Shuppan, 2023).

研究分野：東欧史、ナショナリズム、ファシズム

キーワード：ファシズム 対独協力 対日協力 知識人 グローバル・ヒストリー 帝国主義 国際比較 第二次世界大戦

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第二次大戦時に日独帝国の被占領地または勢力圏となった中国および南東欧諸地域(イタリア、クロアチア、リトアニア)における「ファシズム」の統治実践を分析対象とした上で、その国際比較を行うものである。その調査を開始する強い動機は、近年世界規模で隆盛を見せている「記憶の政治」を巡る問題に対して、歴史学の側からの回答を試みることにあった。現在進行中のウクライナ紛争に際しても、第二次大戦期のウクライナに対ナチ協力者が存在したことをロシア側が指摘し、侵攻の正当化に利用されるといった事態が発生している。このような歴史の政治利用はもとより、一部のヨーロッパ諸国、とりわけナチ・ドイツの勢力圏に置かれた東欧諸国では大戦期に対独協力政権が誕生したことで、現在でもその歴史を自国史のなかにもどう位置付けるのか、またいかに過去と向き合うかという問題を巡り国内外での論争が絶えない。翻ってアジア諸国に目を向ければ、やはりジャーナリズムの界隈から「歴史戦」と総称されるような、歴史観の衝突が政争にまで発展する、あるいは政争に際して過去の経験を非難の材料に取り上げるといった現象が確認出来る。このような現在の世界情勢の下で拡大している地域対立を、あらためて歴史的かつ巨視的視点から再考するためには、第二次大戦時に「ファシズム」がいかにグローバルな規模で流通したか問い直しながら、その土着化の様態を精査し、かつ比較検討することが重要と考えた。

2. 研究の目的

前項の研究背景・動機を出発点としながら、本課題の最大の目的はグローバル・ファシズムという新たな研究領域の開拓にある。実のところ、ファシズム研究は西洋史、東洋史双方において研究内容や方法論が分断されている。西洋史の領域ではナチ・ドイツと東欧諸国の関係は単純な「支配-被支配」の構図で語られることが多い。その一方、中国史研究の文脈では汪精衛政府の研究を筆頭に対日協力者の研究がミクロな実証研究の観点からも進展している(関智英『対日協力者の政治構想』2019年)が、各国史の研究者間で比較史のアプローチが採用されることは少ない。そこで東西を架橋するファシズム研究の視座として、日独の「帝国主義」が展開する中で、いかにその内部で「コラボ(漢奸)」が単なる体制従属ではなく「主体性」を発揮し得たか考察することを目指した。つまり被占領地あるいは日独の勢力圏に置かれた地域において、「ファシズム」が様々なアクターの思惑によって換骨奪胎され、地域住民も取り込む形で歪な統治空間が現出した過程を炙り出すこと、さらに国際比較を試みながらその過程を世界史的現象として可視化させることを研究目的とした。その成果を本邦におけるグローバル・ファシズム研究の基礎とすべく研究を開始した。

3. 研究の方法

研究開始当初は具体的な方法として日独帝国統治下における(1)動員体制(2)食糧政策に注目しながら、大衆層の地平で「ファシズム」のイデオロギーや政策がどのような影響を及ぼしたか実証研究を重ねることを目指していた。ただし世界的な新型コロナ・ウィルスの流行により、欧州や中国における現地調査がほぼ不可能となったため、既に収集済みの史資料を駆使しながら、あらためて為政者や知識人に代表される「コラボ(漢奸)」の実態の検証に努めるべく、方法論を再考した。

その際、比較研究を遂行するための分析方法として、アウシュヴィッツ強制収容所の生存者である作家プリーモ・レーヴィが戦後唱えた「灰色の領域(グレーゾーン)」という概念を採用した。レーヴィはこの概念で以て、当時のナチ・ドイツ統治下における行動原理について語る場合には、「協力/抵抗」という二分法に基づく理解から距離を置き、むしろ人びとがその間を逡巡せざるを得ない境遇に追いやられるといった、「支配-被支配」構造に内包された複雑さそのものを直視する必要性を唱えたとされる。本研究グループに加わった各メンバーはこの視点を共有した上で、個々の研究対象地域における「コラボ(漢奸)」あるいはその組織がいかなる「グレーゾーン」を孕みながら政治的選択を行ったか精査することで、その「主体性」を決定づけた統治構造自体の解明に取り組んだ。

共同研究を進めるにあたっては、やはり新型コロナ・ウィルスの影響から対面での会合開催が困難になったことから、オンラインでのミーティングを継続し、それぞれの研究内容を比較検討する態勢を整えた。また本研究の目的であるグローバル・ファシズム研究の開拓のためには西洋史・東洋史両分野の専門家の幅広い結集が不可欠であったため、オンライン・ワークショップを定期的に開催し、本研究課題に関心を持つ外部の研究者を積極的に招くことで共同研究の活性化に努めた。

4. 研究成果

本研究の成果として、まず前述したオンライン・ワークショップの開催により、国内外の研究者にグローバル・ファシズム研究の指針をアピール出来たこと、またそれを通じて新たに研究上の繋がりを得て、研究課題をさらに広がりのあるものに出来たことが挙げられる。2021年7月

に、本課題の研究メンバーを報告者に据えたオンライン・ワークショップ「戦時期「グレーゾーン」を架橋する 東アジア・欧州の被占領地からの視点」を企画・開催した。戦間期から戦時期の中国（高綱、関）、イタリア（新谷）、リトアニア（重松）、クロアチア（門間）の事例を取り上げながら、日独帝国の統治体制下における「コラボ（漢奸）」あるいは関連組織の実態について各人が報告した。なおその内容はブックレット化した上で関心のある研究者に配布した。さらに同年10月にオンライン・国際ワークショップ「Fascism in Motion」を開催し、国内外の研究者と共に、アジアとヨーロッパの両地域（日本、中国、インド、カンボジア、タイ、ブラジル、ルーマニア、ギリシャ、クロアチアなど）における「ファシズム」の土着化の様態について議論する場を作った。それにより、現在のグローバル・ファシズム研究の国際的水準を確認することが出来た。

なお、本研究課題は当初2021年度（令和3年度）で完了する予定だったが、研究期間を通じて現地渡航が制限されたことの影響を鑑みて、上記の様に研究方針を一部修正した上で、2022年度（令和4年度）末まで研究期間を延長した。

最大の研究成果物としては、2023年3月に論集『グレーゾーンと帝国：歴史修正主義を乗り越える生の営み』（勉誠出版）を刊行したことを特筆したい。研究代表者および分担者（門間卓也、高綱博文、関智英）が編著者となり、他分担者に加えて、研究活動を通じて知己を得た西洋史および東洋史の領域の専門家が寄稿する形態をとった。これまで西洋史あるいは東洋史という枠組みで「コラボ（漢奸）」の様態を検討する研究プロジェクトはあったが、両者を架橋する本格的な研究論集は本邦において類を見ないものである。本書はファシズム運動のグローバル性とその地域的偏差の双方について可視化させながら、同時にそれらを理論的に包括する「灰色の領域（グレーゾーン）」（レヴィ）という概念の実証的検証を試みたものと言える。

西洋史に軸足を置く論考では、既に「対独協力」の展開が本邦でもよく知られたフランスの事例に始まり、それとの比較も視野に入れながら、リトアニアやクロアチア、そしてポーランドといった東欧における事例分析を行った。また東洋史の専門家による論考では、中国史のみならず東南アジア諸国（ビルマ、フィリピン）の視点から「対日協力」の多様かつ複雑な展開について詳述している。

先述したように、ミクロな分析を土台としながら、日独帝国による統治実践というグローバルな秩序再編の試みの中、共時性を伴った多様な「ファシズム」の土着化が進むというマクロな構造を詳らかにしたことの意義は大きい。ただしその具体的な比較検討は、海外渡航が出来ずに実証研究が不足したことを要因として、未だ不十分である。この点を今後の展望に据えるとして、グローバル・ファシズム研究が提示し得る分析上の観点として以下の二点が挙げられる。一つは地政学的環境に因る対独あるいは対日関係の差異であろう。特に東欧諸国は戦間期にソ連からの脅威にも直面しており、必然的に政治的選択の幅が狭まることになった。また実際に対独協力で踏み切った諸勢力間で相互参照的にナチ・ドイツへの依存度について「学習」されており、その結果として為政者や知識人の「協力／抵抗」の様態も複雑化することになった。もう一つは、「コラボ（漢奸）」当事者の戦前からの経験である。「ファシズム」の土着化を促す際に、一部の為政者や知識人はそれまでの「旧体制」の崩壊を目の前にして、来る日独帝国の統治下における地位上昇を目論んでいた。そのような目論見を構えた要因の一つとして、当の「コラボ（漢奸）」が理想化していたナショナリズムの存在が指摘出来る。

あらためて今後の展望を述べれば、このような着眼点を基礎としてさらに国際比較を推進した上で、戦前・戦中・戦後を跨ぐ形で「ファシズム」の盛衰、そして継承や連続性といった問題をグローバルな規模で検証することが望まれる。その新たな課題設定を通して、第二次大戦の世界史的意義を「抑圧からの解放」とは異なる観点から論じること、それでいて現在の「記憶の政治」を巡る対立軸を形成している歴史認識に再考を促すことが今後の目標となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 関智英	4. 巻 27
2. 論文標題 史料紹介『江蘇日報』社評目録（2）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明大アジア史論集	6. 最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 重松尚	4. 巻 67
2. 論文標題 ホロコーストの原因の追求と責任の追及 『同胞』（ルータ・ヴァナガイテ、エフライム・ズロフ著）の出版に寄せて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 重松尚	4. 巻 36
2. 論文標題 書評 菅野賢治著『「命のヴィザ」言説の虚構 リトアニアのユダヤ難民に何があったのか？』（共和国、2021年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 81-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関智英	4. 巻 1
2. 論文標題 日本敗戦後、外務省で翻訳された汪精衛政権刊行物 許錫慶編著『中国革命之理論与史実』の周辺	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史系検討会論文集（日本国際問題研究所・東アジア史検討会）	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 関智英	4. 巻 48
2. 論文標題 華北青年党と日本 日中戦争時期の対日協力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代中国研究	6. 最初と最後の頁 26-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関智英	4. 巻 26
2. 論文標題 史料紹介:『江蘇日報』社評目録(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明大アジア史論集	6. 最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高綱博文	4. 巻 104
2. 論文標題 「青山事件」の記憶 宮崎滔天・中村彌六・犬養毅・平山周の場合ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史叢	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高綱博文	4. 巻 35
2. 論文標題 戦後上海における内山完造 新史料による検討を中心にー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 研究紀要(日本大学通信教育部)	6. 最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高網博文	4. 巻 34
2. 論文標題 戦後上海<グレーゾーン> 上海最後の日本語新聞『改造日報』をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究紀要(日本大学通信教育部)	6. 最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新谷崇	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 パンと祖国：ファシズムの小麦戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 重松尚	4. 巻 202
2. 論文標題 権威主義政権に対抗するファシズム体制構想 リトアニア人行動主義連合(LAS)の分析を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際政治	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門間卓也	4. 巻 66
2. 論文標題 書評/タラ・ザーラ著『失われた子どもたち 第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建』(みすず書房、2019年)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 東欧の「ファシズム」 両大戦間期・第二次大戦期のリトアニア人ナショナリズム運動の事例から
3. 学会等名 東京大学GSIキャラバンプロジェクト「「小国」の経験から普遍を問いなおす」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 リトアニアにおける対ナチ協力の階層性
3. 学会等名 グレーゾーン研究会ワークショップ「戦時期「グレーゾーン」を架橋する 東アジア・欧州の被占領地からの視点 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 第二次世界大戦開戦前後のリトアニアの外交政策をめぐる議論
3. 学会等名 日本国際政治学会2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間 卓也
2. 発表標題 「クロアチア独立国」における知識人とプロパガンダ 「民族共同体」のグレーゾーン
3. 学会等名 グレーゾーン研究会ワークショップ「戦時期「グレーゾーン」を架橋する 東アジア・欧州の被占領地からの視点 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takuya MOMMA
2. 発表標題 The Lure of Fascism: winding paths to the radicalization of Croatian nationalists during the interwar period
3. 学会等名 Online-workshop "Fascism in Motion: Concepts, Agents and the Global Experiences" (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間 卓也
2. 発表標題 戦時体制に連なる教師たち：「クロアチア独立国」のジェンダー規範を巡る考察
3. 学会等名 第2回WINE若手研究者研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 関智英
2. 発表標題 中国第三勢力の対日協力 華北の動きを中心に
3. 学会等名 中国現代史研究会（関西）年次総会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 両大戦間期リトアニアの反ユダヤ主義的言説と事件
3. 学会等名 ワークショップ「大戦間期中東欧における反ユダヤ主義の展開 地域比較の観点から」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 1930年代リトアニアのカトリック青年知識人と有機的国家構想
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター公募プロジェクト型共同研究「戦間期東欧社会の権威主義体制と極右民族主義勢力の分析 グローバル・ファシズムの潮流に注目して」ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間卓也
2. 発表標題 「バルカン型政治」の権威主義とファシズム ユーゴスラヴィア王国の「クロアチア人問題」を巡るプロパガンダ
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター公募プロジェクト型共同研究「戦間期東欧社会の権威主義体制と極右民族主義勢力の分析 グローバル・ファシズムの潮流に注目して」ワークショップ
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 高綱博文・門間卓也・関智英（共編著）／新谷崇・猪狩弘美・重松尚（分担執筆）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 536
3. 書名 グレーゾーンと帝国：歴史修正主義を乗り越える生の営み	

1. 著者名 関智英（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 276
3. 書名 概説 中華圏の戦後史（担当：第三章 香港・マカオ 中国と世界の狭間（1950年代～））	

1. 著者名 関智英（監訳）（ラナ・ミッター著、濱野大道訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 中国の「よい戦争」 甦る抗日戦争の記憶と新たなナショナリズム（担当：解説 なぜ抗日戦争は「よい戦争」となったのか？）	

1. 著者名 ルータ・ヴァナガイテ、エフライム・ズロフ（重松尚訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋書店新社	5. 総ページ数 472
3. 書名 同胞	

1. 著者名 重松尚（中欧・東欧文化事典編集委員会編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 中欧・東欧文化事典（分担執筆：「バルトの歴史」）	

1. 著者名 関智英（楊際開、伊東貴之編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 464
3. 書名 「明治日本と革命中国」の思想史 近代東アジアにおける「知」とナショナリズムの相互還流（分担執筆：「汪精衛の日本留学と陽明学 その活動の背景」）	

1. 著者名 関智英（許雪姬著（羽田朝子、殷晴、杉本史子訳））	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 616
3. 書名 離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録（分担執筆：「解説」）	

1. 著者名 関智英（川島真、岩谷將編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 360
3. 書名 日中戦争研究の現在 歴史と歴史認識問題（分担執筆：「占領地における中国第三勢力 中国社会党・中国国民党を中心」）	

1. 著者名 関智英（吉澤誠一郎監修）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学 アジア・アフリカへの問い158（分担執筆：「日中戦争の展開 戦争はなぜ長期化したのか」）	

1. 著者名 門間卓也（歴史学会編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 「歴史総合」世界と日本：激変する地球人類の未来を読み解く（分担執筆：「なぜ世界恐慌をきっかけに国際関係は変容したのか」）	

1. 著者名 エスニック・マイノリティ研究会（編）（重松尚ほか著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京外国語大学海外事情研究所	5. 総ページ数 222
3. 書名 多様性を読み解くために（分担執筆：「実質的な平等」に向けた試み：中・東欧における属人的自治構想から考える）	

1. 著者名 石田勇治、川喜田敦子（編）（猪狩弘美ほか著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ（分担執筆：ナチ強制収容所体験と生存者たちのその後）	

1. 著者名 関智英（監修・解説）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ゆまに書房	5. 総ページ数 4657
3. 書名 日中戦争期「対日協力政権」（全10巻）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高綱 博文 (Takatsuna Hirofumi) (90154799)	日本大学・通信教育部・教授 (32665)	
研究分担者	関 智英 (Seki Tomohide) (30771836)	津田塾大学・学芸学部・准教授 (32642)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新谷 崇 (Araya Takashi) (30755517)	茨城大学・教育学部・助教 (12101)	
研究分担者	重松 尚 (Shigematsu Hisashi) (90850917)	東京大学・大学院総合文化研究科・助教 (12601)	
研究分担者	猪狩 弘美 (Igarai Hiromi) (30732606)	桐朋学園大学・音楽学部・非常勤講師 (32662)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Online-workshop "Fascism in Motion: Concepts, Agents and the Global Experiences"	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関